

法住寺殿跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一九―一四

法住寺殿跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

法住寺殿跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、収蔵庫建設に伴う法住寺殿跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

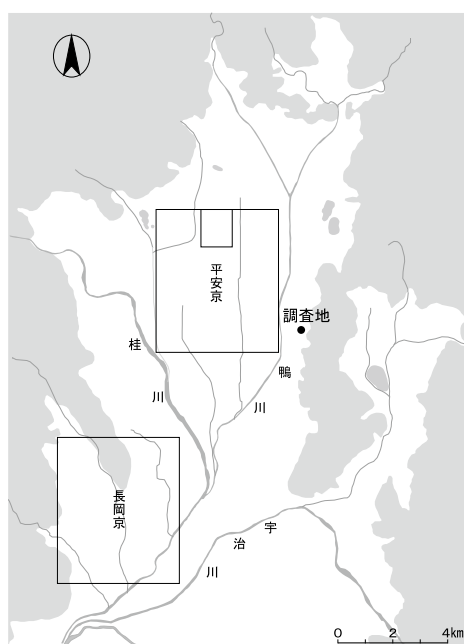
令和2年6月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 法住寺殿跡（京都市番号 19 S 111） |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区東大路通七条下る東瓦町964 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 総本山智積院 代表役員 芙蓉良英 |
| 4 調査期間 | 2020年1月20日～2020年2月7日 |
| 5 調査面積 | 86.25㎡ |
| 6 調査担当者 | 木下保明 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 木下保明 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概要	4
(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構	4
(4) 近世以降の遺構	5
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) 瓦類	12
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第2面東部（東から）
		2	第1面全景（南東から）
図版2	遺構	1	整地層下部（南から）
		2	土坑7（北西から）
		3	土坑1（西から）
図版3	遺物	土器類	
図版4	遺物	瓦類	

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景（西から）	2
図3	作業風景（東から）	2
図4	調査区配置図（1：500）	2
図5	調査区北壁断面図（1：50）	6
図6	調査区東壁断面図（1：50）	7
図7	第2面平面図（1：100）	8
図8	第1面平面図（1：100）	9
図9	出土土器実測図（1：4）	11
図10	出土瓦拓影及び実測図（1：4）	12

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	10

付 表 目 次

付表1	土器観察表	14
付表2	瓦観察表	15

法住寺殿跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、宗教法人総本山智積院の（仮称）新展示収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、京都市東山区東大路通七条下る東瓦町964で、総本山智積院の境内の南辺に位置する。当地は、後白河上皇によって造営された法住寺殿跡の南殿推定地の東端部にあたっている。

調査に先立って実施された京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の試掘調査の結果、中世以前の整地層が見つかり、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、文化財保護課の指導のもとに、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

(2) 調査の経過

調査は、平安時代後期から鎌倉時代の遺物を含む整地層上面（第1面）までを重機で掘削し、その後は人力による遺構検出を実施した。写真撮影・平面実測等の記録作業を行った後、整地層を掘り下げて、第2面の遺構調査を実施し、最後に壁面の断面実測等を行った。調査区は重機で埋め戻

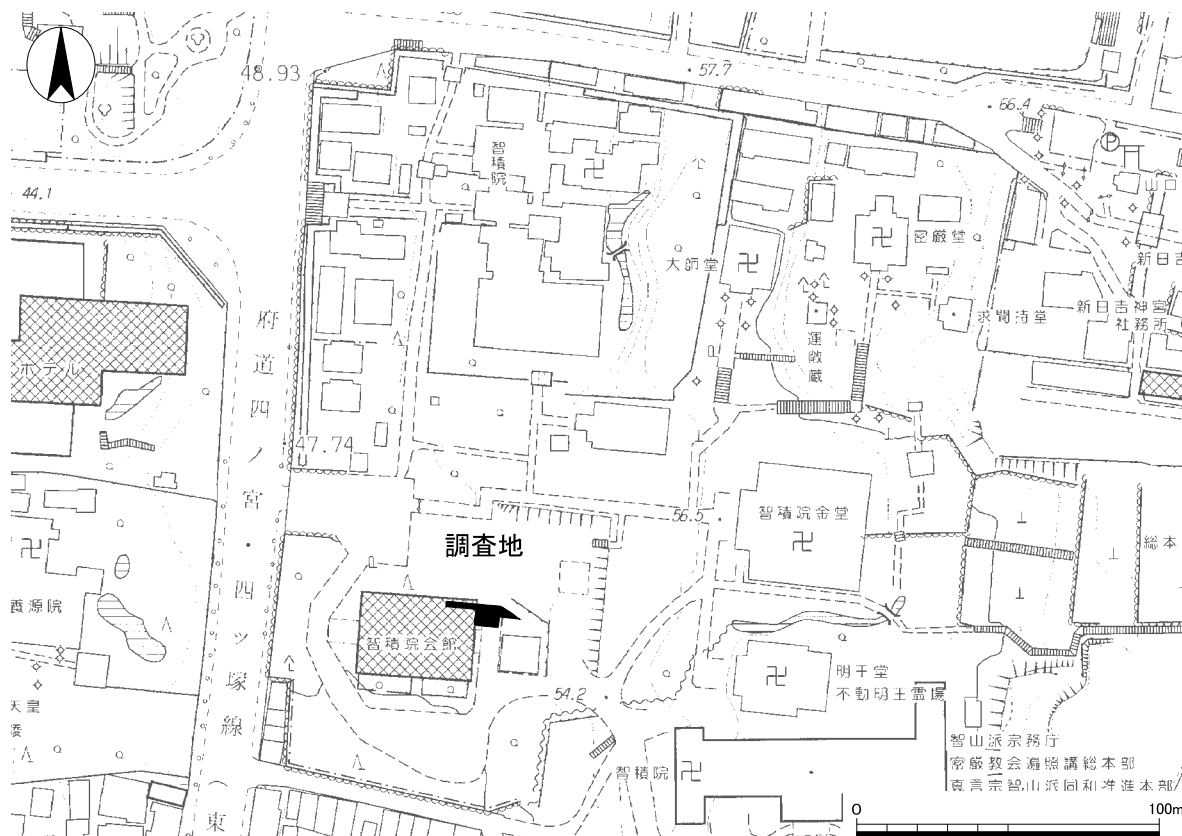


図1 調査地位置図（1：2,500）



図2 調査前全景（西から）



図3 作業風景（東から）

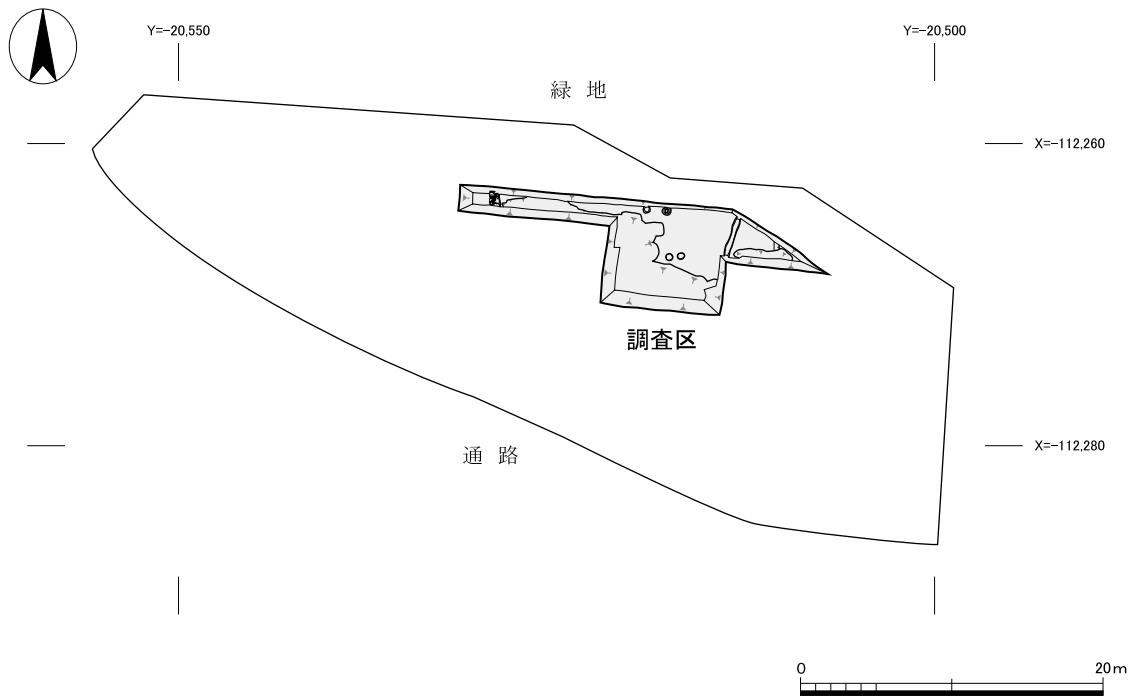


図4 調査区配置図（1：500）

して調査を終了した。調査期間は、2020年1月20日から同年2月7日、調査面積86.25㎡である。

調査中、文化財保護課の臨検を適宜受けた。また、近畿大学の網 伸也教授、立命館大学の木立 雅朗教授により、調査の検証を受けた。

2. 位置と環境

調査地は、現在の東大路七条の交差点から南へ約150m下がった東山丘陵の裾部に立地し、総本山智積院境内の南辺に位置する。

調査地は、後白河上皇が造営した法住寺殿跡にあたる。法住寺殿は、洛東地域（鴨川以東）の南側、現七条大橋を東へ渡った一帯に造営された。法住寺殿の範囲は、北は七条坊門小路末、南は八条大路末、東は東山、西は鴨川に画された、南北約1.1km、東西約0.5kmにわたっている。域内には院の御所（法住寺北殿・法住寺南殿）、御堂（蓮華王院・最勝光院）、新熊野神社が造営された。後白河上皇の院政の政治拠点として機能したが、院政の衰退とともに荒廃し、現在では蓮華王院の一画（三十三間堂）を残すだけとなっている。

織豊期になると、当地に祥雲寺が創建された。祥雲寺は、豊臣秀吉の遺児（鶴松）の菩提を弔うために造られた寺院である。その祥雲寺と豊国社の坊舎の一部を基にして、智積院堯性（玄宥）によって智積院が開創された。智積院は、豊臣秀吉によって焼き討ちにあった紀州根来寺智積院を再興した寺である。慶長六年（1601）、徳川家康により豊国社の坊舎の一部が与えられた。豊臣家滅亡後の元和元年（1615）、祥雲寺の寺地も智積院の所有となった。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5・6)

基本層序は、地表下0.4～0.5mが現代の盛土であり、調査区の東端では盛土直下（地表下約0.6m、標高49.5m）で地山が検出され、一段低くなった西側では堆積層（図5・6の7～9層）が確認される。堆積層は基本的に地表下約1.0～1.1mまでオリーブ色シルト→灰白色シルト→灰オリーブ色シルトの順に堆積しているが、北壁の東半部では畝状の堆積（6層）状況がみられる。畝状の堆積は、畑作に伴う耕作土である可能性が高い。いずれの堆積層も遺物が出土していないので、時期は不明である。その下に厚さ10cm前後のオリーブ黒色粗砂混じりシルト（10層）が検出される。この下に、黒色系の砂質シルトと灰色系の粗砂が互層になった平安時代後期から鎌倉時代の遺物を包含する整地層（14～21層）が堆積している。整地層は搗き固められたとみられ、出土した土師器の皿が割れて小片となったもの、表面が剝離したものが少なくない。整地層の一部で帯状の敷石（20層）を検出したが、整地工事の一環として軟弱な箇所を補強するため、または作業単位と考えられる。

整地層の上面を第1面、整地層の下面を第2面として調査を行った。整地層の下が地山となる。地山は、調査区東端では標高49.5m、それより西側の地山面は標高48.8m前後で段差（段差9）が付く。西側はほぼ平坦である。

(2) 遺構の概要 (表1)

検出した主な遺構は、平安時代後期から鎌倉時代の土坑（第2面）、土坑・溝（第1面）、近世以降の土坑がある。

(3) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構

第2面の遺構 (図7、図版1・2)

土坑7 調査区の東辺で検出した矩形の土坑である。東西幅2.9m、南半が調査区外にのびるが南北の現存長は2.1m、深さ0.85mである。土坑の西半は整地層に覆われているが、東半は直接地

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期	段差9	
平安時代後期 ～鎌倉時代	土坑7・8	第2面
	溝2、土坑3～6	第1面
近世以降	土坑1	

山を切り込んでいる。土師器の皿・羽釜、輸入陶磁器の椀・盤、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、木製品の箸・曲物底板などが出土している。

土坑 8 調査区中央と東部の境で検出した土坑である。北西部のみの検出で、形状・規模は不明である。遺物は出土していない。

他に、径0.4～0.45mの自然石が据えられたような状況で検出したが、上面が平坦ではなく突出しているので、礎石として使用されたとは考えられない。

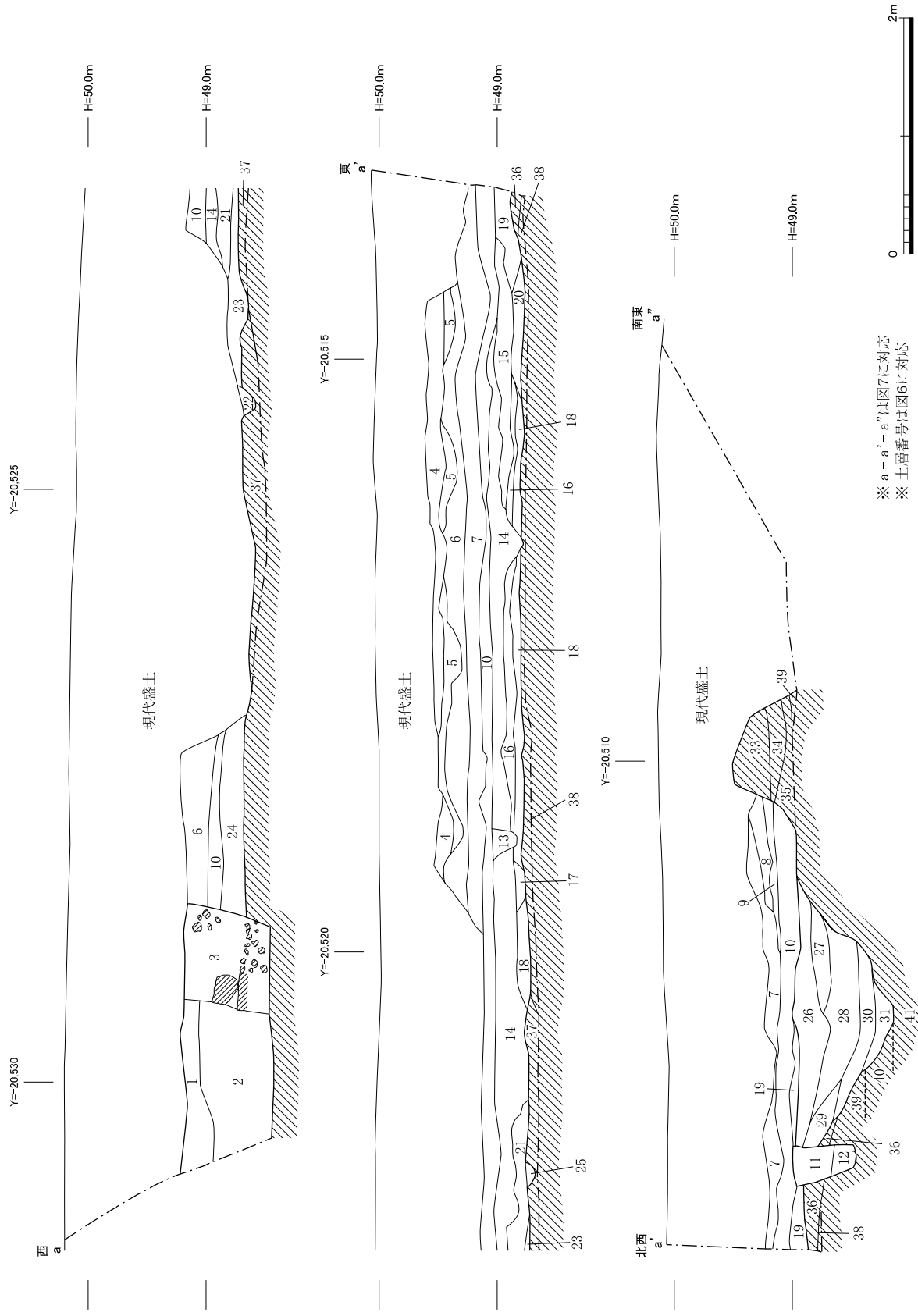
第1面の遺構（図8、図版1・2）

溝 2 土坑7が埋められてから造られた溝である。N15° Eの傾きをもち、現存長2.7m、幅0.35m、深さは0.55mである。断面は逆台形で、堆積層は2層に分かれる。上層は浅黄色シルトと灰色粗砂が斑状に混じり、下層は灰色シルトと浅黄色シルトが縞状に混じる。底部には竹が据え付けられている。暗渠排水溝として機能していたものと考えられる。

土坑 3～6 調査区の中央部で検出した。径0.45～0.6m、深さ0.06～0.2mの円形の浅い土坑である。堆積層は褐灰色粘土で、土師器皿の小片が少量出土している。

（4）近世以降の遺構（図版2）

土坑 1 調査区の西端で検出した。上部が壊されているが、花崗岩3石前後を積み重ねて構築されており、掘形と石積の間には径4～8cmの礫が多量に詰め込まれている。埋土はシルトと粗砂の互層で、最下層には樹木片、板状の木製品片が堆積しているので、水を貯める施設と考えられる。東辺の一部のみの検出で、規模は不明である。深さは0.8mである。土師器の皿、施釉陶器の椀・鉢・信楽甕、染付の椀、土管、棧瓦、漆喰などが出土している。

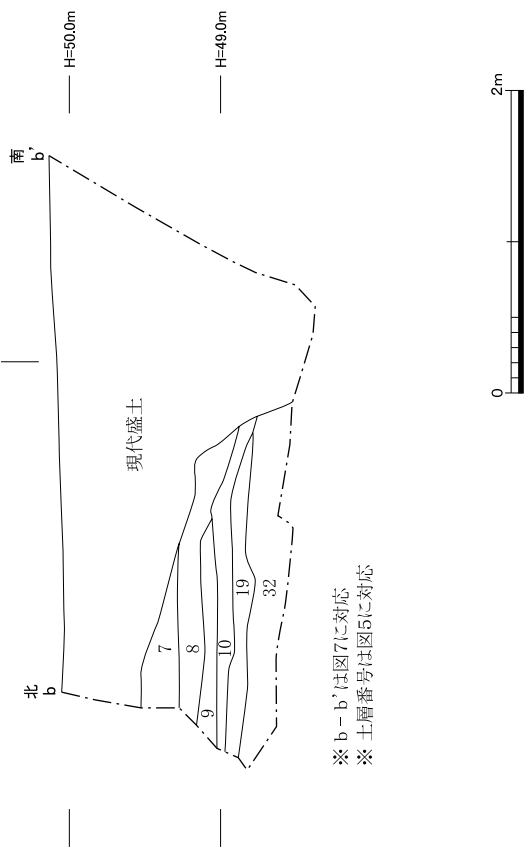


※ a-a'は図7に対応
 ※ 土層番号は図6に対応

図5 調査区北壁断面図 (1 : 50)

- 1 5Y5/1 灰色砂泥 粘土ブロック混じる
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 粗砂・炭混じる
- 3 5Y4/1 灰色粘土 φ4~8cmの礫混じる
- 4 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂とシルトの互層
- 5 5Y2/1 黒色シルト 粗砂混じり
- 6 2.5Y6/2 灰黄色シルト 粗砂混じる
- 7 5Y6/6 オリーブ色シルト 微砂・φ1~3cmの礫混じる
- 8 7.5YR8/1 灰白色シルト 粗砂混じる
- 9 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 粘土・φ1cm前後の礫混じる
- 10 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト 粗砂混じる
- 11 5Y7/4 浅黄色シルト・10Y5/1 灰色粗砂が斑状に混じる
- 12 10Y4/1 灰色シルト・5Y7/4 浅黄色シルトが塊状に混じる
- 13 10YR4/1 褐色粘土 土師器混じる
- 14 10YR2/1 黒色砂泥やや粘質 土師器多量に混じる
- 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 粘土混じる
- 16 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂
- 17 2.5Y5/1 黄灰色粗砂
- 18 5Y5/2 灰オリーブ色粘土
- 19 10Y5/1 褐色シルト 粗砂混じる
- 20 5Y5/2 灰オリーブ色シルト φ2~6cmの礫混じる
- 21 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土
- 22 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥粘質
- 23 2.5Y3/1 黒褐色砂泥粘質
- 24 10YR4/1 褐色粘土 粗砂混じる
- 25 2.5Y6/1 黄灰色粗砂
- 26 2.5Y3/1 黒褐色シルト 粗砂・φ2~3cmの礫混じる
- 27 7.5Y6/3 オリーブ黄色シルト
- 28 10Y6/1 灰色粗砂 φ3~5cmの礫混じる
- 29 5Y4/1 灰色シルト 粗砂混じる
- 30 5Y4/1 灰色粗砂
- 31 10YR5/1 褐色シルト 粗砂混じる
- 32 5Y2/1 黒色シルト・10YR7/5 明黄褐色粘土が斑状に混じる
- 33 5Y8/1 灰白色砂礫
- 34 5Y8/3 淡黄色砂礫
- 35 10YR7/8 黄褐色砂礫
- 36 5Y6/1 灰色粗砂 φ2~4cmの礫混じる
- 37 10YR3/3 暗褐色砂泥やや粘質 固く締まる
- 38 2.5GY6/1 オリーブ灰色粗砂
- 39 5Y7/4 淡黄色粘土
- 40 7.5Y7/2 灰白色粘土
- 41 5Y8/1 灰白色砂礫

土坑1
耕作土(畑)
堆積層
溝2
土坑3
整地層
土坑7
土坑8
地山



※ b-b'は図7に対応
※ 土層番号は図5に対応

図6 調査区東壁断面図 (1:50)

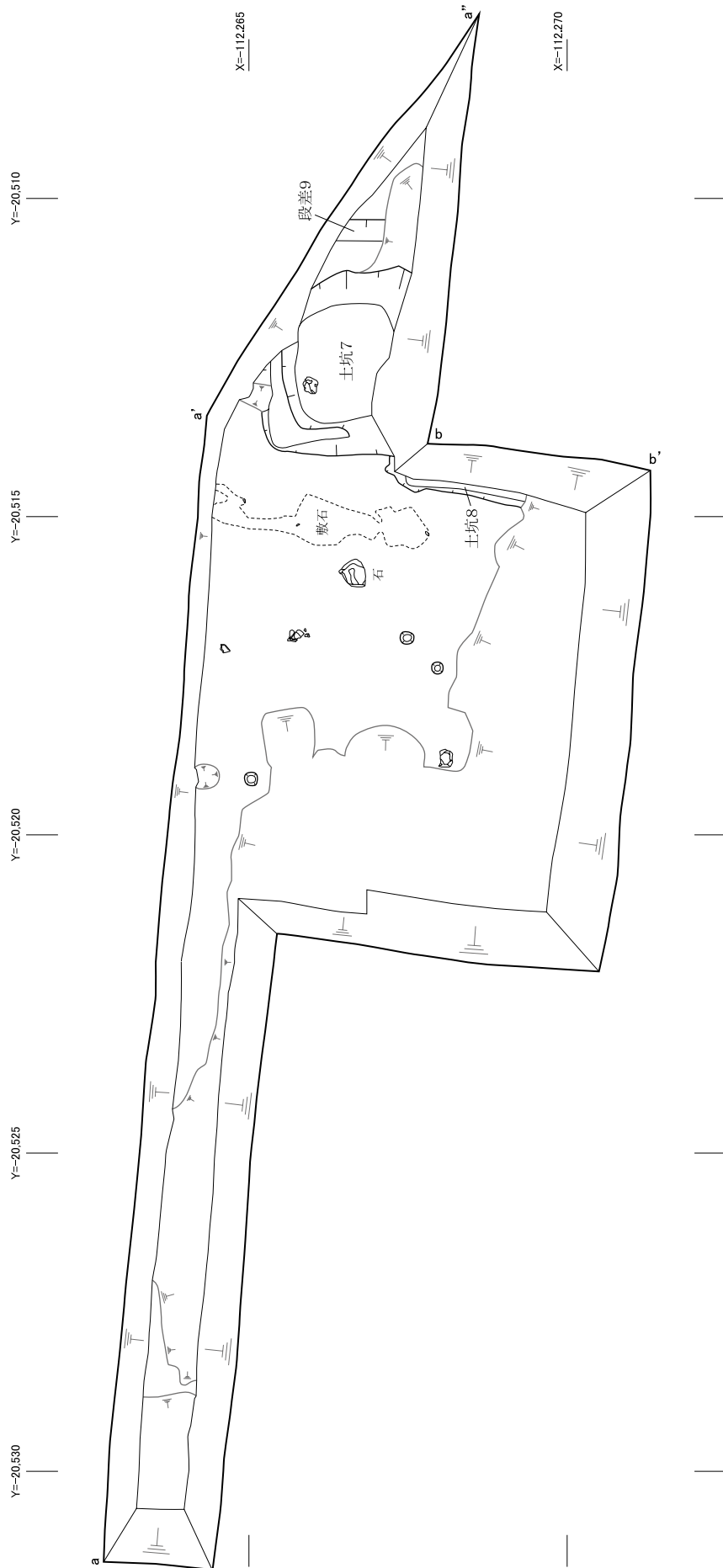


图7 第2面平面图 (1 : 100)

※ a-a' - a'' は図5、b-b' は図6に対応

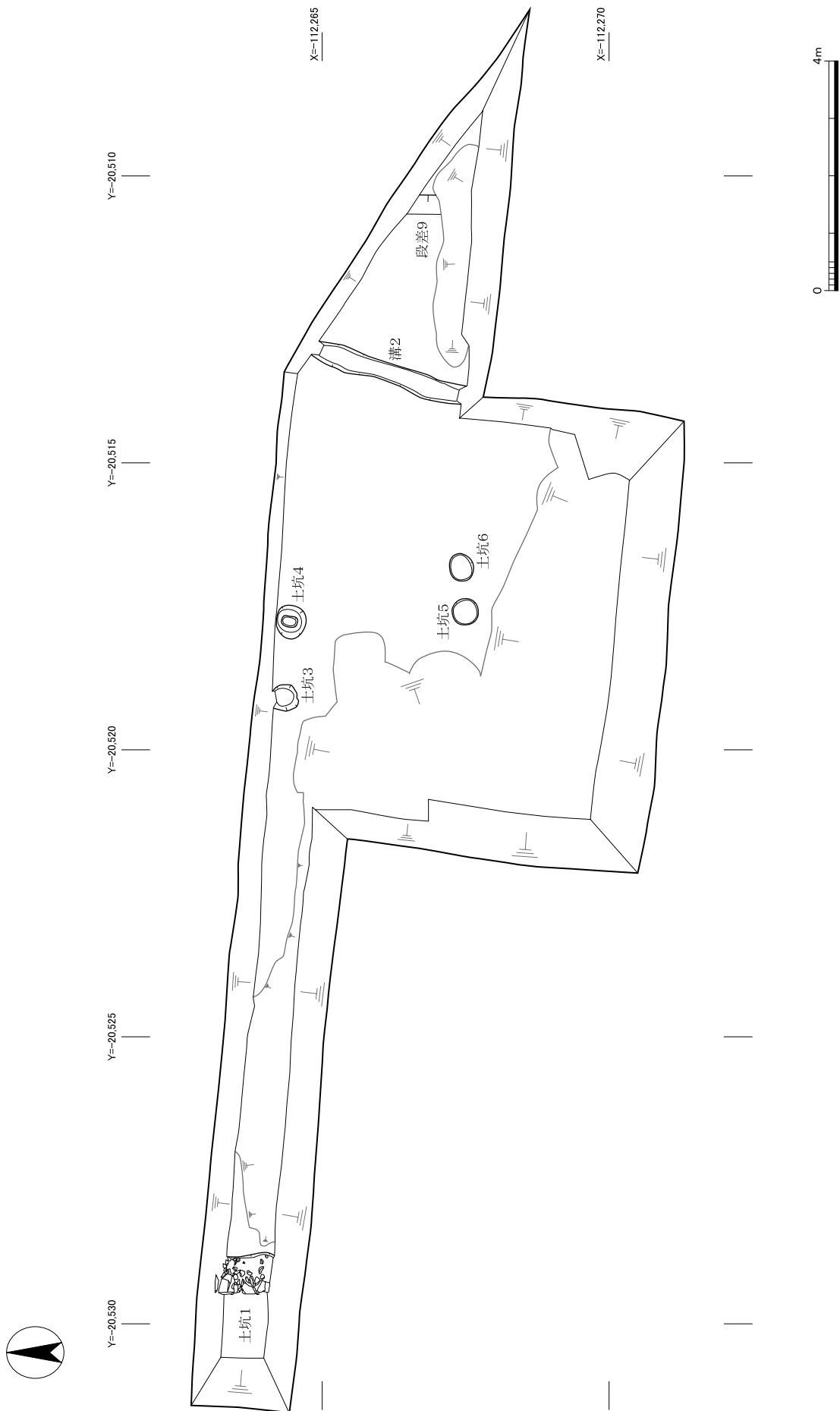


图8 第1面平面图 (1 : 100)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表2)

今回の調査では整理箱で8箱の遺物が出土した。出土した遺物には土器・陶磁器類、瓦類、木製品、石製品などの種類がある。時代は平安時代後期から鎌倉時代、近世以降である。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物の大半は、土師器の皿である。他に、土師器の甕・羽釜、白色土器の皿・椀・高杯、山茶椀系の皿、須恵器の甕・鉢、瓦器の羽釜・鍋・盤、輸入陶磁器の白磁椀・青磁椀・青白磁合子蓋・褐釉陶器盤・緑釉陶器盤、瓦類の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、木製品の箸・曲物、石製品の砥石などがある。

近世以降の遺物には、土師器の皿、施釉陶器の椀・鉢、焼締陶器の挿鉢、棧瓦、土管などがある。

(2) 土器類 (図9、図版3、付表1)

1) 平安時代後期から鎌倉時代の土器類

土坑7出土土器(1～15・33～36) 1～8は土師器の皿である。1・2はいわゆるコースター形の皿である。平らな底部から内側に強く折れ曲がる口縁部からなる。口縁部と内面はナデ調整、外面は成形時の指オサエ痕が残る。3～6は径9.0～9.6cmの小型の皿である。7・8は径13.4cmの大型の皿である。比較的平坦な底部から内湾しながら外上方にのびる。口縁部は2段のヨコナデ、内部底面は仕上げナデを施す。底部は無調整である。いずれも胎土が精良で、長石・石英・雲母などを含んでいる。9は土師器の大型の羽釜である。球状に湾曲する体部と口縁部の境に幅2.2cmの鑿が付く。口縁部は内傾し、端部は丸みをおびる。外面は指オサエの後に縦方向に板状工具によるナデ調整、内面は横方向に板状工具で密にナデ調整を施す。

10～13は白色土器である。10は小型の皿である。ロクロによる成形で、全体に回転ナデの痕跡が残る。底部には回転台と切り離すための糸切り痕が認められる。11は小型の椀で、10と同様にロクロによって成形されている。12は高杯の杯部である。13は高杯の脚部である。外面をヘラで

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、白色土器、山茶椀、瓦器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、石製品、木製品、鉄製品		土師器21点、須恵器1点、白色土器4点、山茶椀1点、瓦器4点、輸入陶磁器13点、軒丸瓦4点、軒平瓦3点		
近世以降	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦、石製品、木製品、土管				
合 計		9箱	51点(2箱)	0箱	7箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

削って粗く面取りをしている。いずれも石英・長石を少量含むが、胎土は精良である。

14・15は瓦器である。14は小型の椀で、口縁端部内面に1条の沈線がめぐる。底部に断面逆三角形の高台がつく。体部・内面はナデ調整、体部に指オサエ痕が残る。内面上部に粗い暗文を施す。15は羽釜で、球状に湾曲する体部と口縁部の境に鏝が付く。口縁部は内傾し、端部は内に突出している。鏝・口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整、外面は指オサエ痕が残る。

33～36は輸入陶磁器である。33は白磁の椀で、内面に花卉文を陽刻している。34・35は青磁の椀である。36は褐釉陶器の盤の底部である。

整地層出土土器 (16～30・37～44) 16～27は土師器の皿である。16～23は径8.6～9.5cmの小型の皿である。16は平坦な底部からほぼ直角に口縁部が短く立ち上がる。24～27は13.2～14.2cmの大型の皿である。形態・調整・胎土は土坑7出土土器と同様である。

28は山茶椀系の小型の皿である。ロクロ成形で、底部に糸切り痕が残る。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。29は東播系須恵器の鉢である。体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部は断面三角形

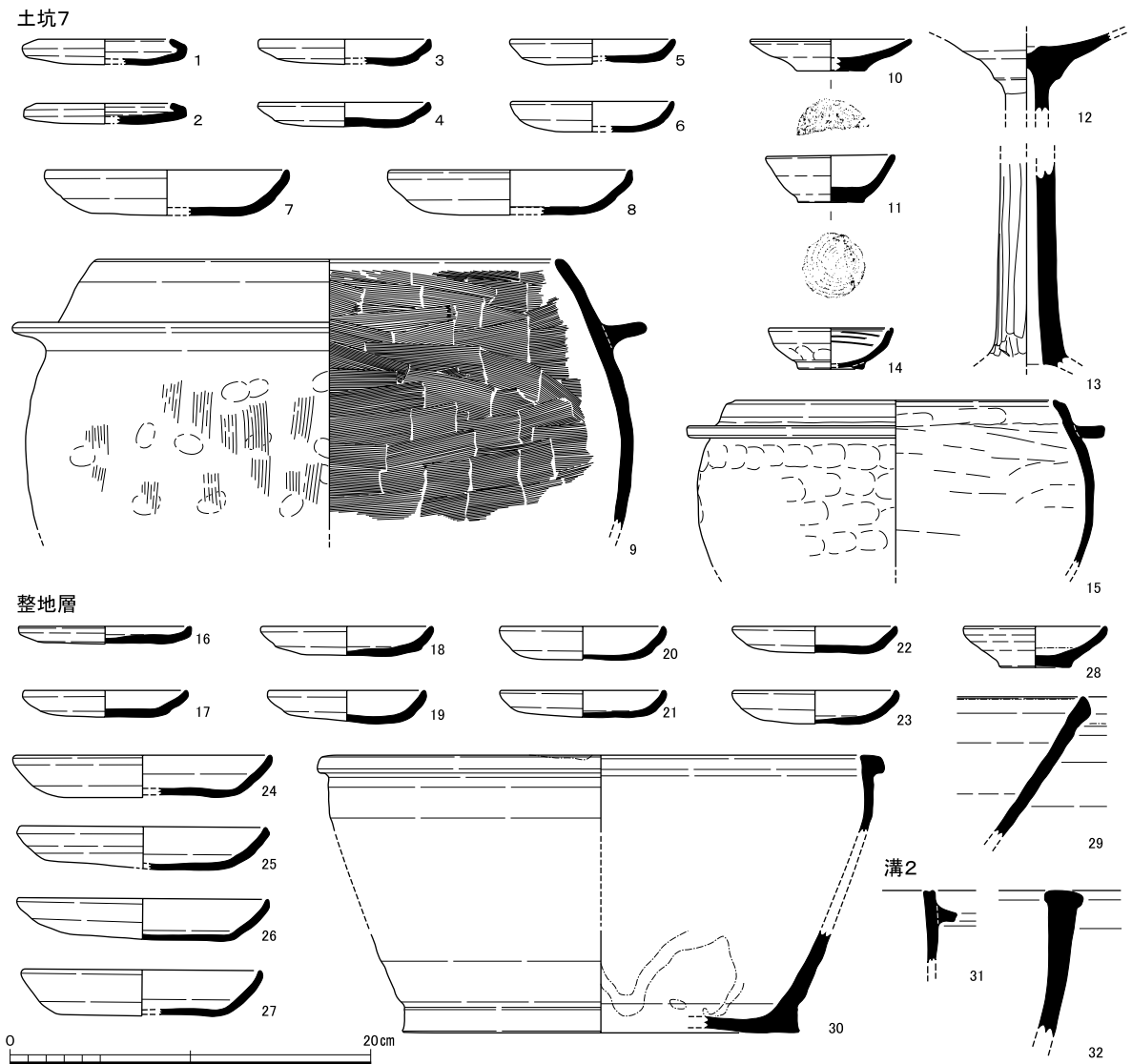


図9 出土土器実測図 (1 : 4)

を呈する。内外面とも回転を利用したナデ調整で、内面には使用痕がある。

30・37～44は輸入陶磁器である。30は泉州窯系の褐釉陶器の鉢である。平高台の底部をもつ。口縁部はほぼ直立し、端部は外側に肥厚する。口縁上端部に重ね焼きの痕跡が残る。破片での復元のため、法量が変わる可能性がある。37～40は青磁の椀である。41は青磁の蓋で、外面に釉がかかるが、内面は露胎である。42は青白磁の合子蓋である。43は白磁の壺で、肩部に把手状の耳が付く。44は泉州窯系の緑釉陶器の盤で、底面内部に線刻の模様を施す。

溝2出土土器 (31・32) 31は瓦器の羽釜である。鏝から口縁部にかけてヨコナデ調整、内面は刷毛目調整を施し、外面に指オサエの痕跡が残る。32は瓦質土器の盤である。口縁端部は平坦で、内外に肥厚する。

(3) 瓦類 (図10、図版4、附表2)

軒丸瓦 (45～48) 45は複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。低い凸型中房で、蓮子は1+5、周りに蕊帯が巡る。蓮弁は互いに接し、子葉はやや盛り上がる。瓦当面に離れ砂が付着している。46は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で圈線がめぐり、蓮弁は突線で、外区に珠文がめぐ^りる。47は単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は丸みを帯びた三角形である。かなり磨耗した範を用いたとみられ、全体に平坦で、蓮子はみとめられない。48は右巻き三巴文軒丸瓦である。巴文の頭部は離れ、尾部は周縁に接しない。45は播磨産、他は山城産である。

軒平瓦 (49～51) 49は唐草文軒平瓦である。上部の周縁は2段になる。50は線刻の斜格子文軒平瓦である。瓦当部を折り曲げ成形した後に、線刻を施したものである。51は右巻き三巴文を連続して配した軒平瓦である。巴文の頭部と尾部は離れ、周囲に界線。瓦当顎部に直線の線刻がある。いずれも山城産である。

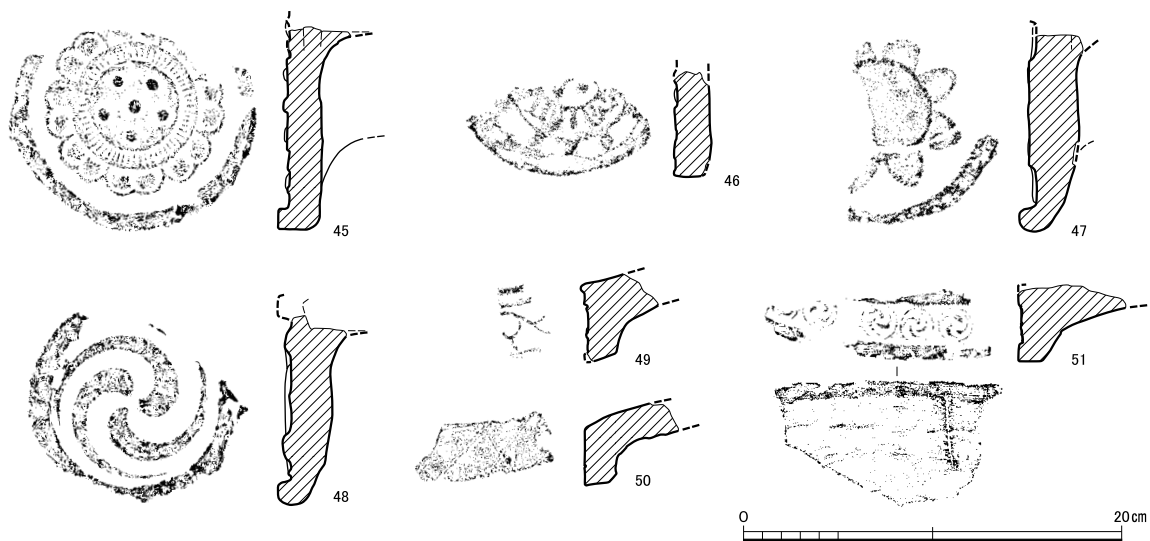


図10 出土瓦拓影及び実測図 (1:4)

5. ま と め

今回の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の遺物を含む整地層を検出した。この整地層は段差9の東側の調査区のほぼ全面で確認した。段差9は地山を人為的に削ることにより生じたもので、東から西に70cmの高低差がある。段差9西側の地山面は、標高48.8m前後で、ほぼ平坦であることから、地山を削る土木工事を行ったものとみられる。整地層は搗き固められており、出土した土器類・瓦類とも小片で、表面が剝離したものが多い。さらに、整地工事の一環として軟弱な箇所を補強するため、または整地作業の単位となる帯状の敷石も検出している。

2012年度に実施された妙法院境内の調査²⁾で、法住寺北殿の造営時に地山を削って敷地を確保した痕跡(段差)が検出されている。この段差は、法住寺北殿の東限を画するものとして報告されている。今回の調査で確認した地山を削る土木工事も、法住寺南殿の造営時のもので、その時に生じた段差は法住寺南殿の東限を示す可能性がある。妙法院の調査で検出された段差はY=-20,520付近で検出されており、約400m南の今回の調査ではY=-20,510付近で段差9を検出している。多少の誤差はあるが、ほぼ同じ位置にあるので、両者は関連して行われた事業と考えて差し支えないといえよう。今回の調査では法住寺南殿造成時の顕著な遺構は検出できなかった。調査地が東限付近であることから遺構の密度が低い可能性もある。

今回、整地層を挟んで上面を第1面、下面を第2面として調査を実施したが、出土した遺物にはほとんど時期差がみられなかった。土坑7や土坑8の遺構は、整地層造成工事の過程で構築された可能性がある。調査地は、周囲より(特に東側)一段低くなっており、降雨があれば滞水し水捌けの悪い場所である。また、調査中にも常時湧水していた。智積院の造成により、法住寺殿存続時の地形を復元することは難しいが、当時も降水や湧水の影響を受けていたと考えられる。整地層を造成する前に、降水や湧水が造成地に影響を及ぼさないように、東端部に土坑7や土坑8が掘られ、造成終了の最後に埋め戻されたと考えられる。造成終了後に、溝2が水切り溝として掘られたと思われる。

註

- 1) 軒瓦類の表現は、『木村捷三郎収集瓦図録』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年)を参照した。
- 2) 『妙法院境内・法住寺殿跡』 古代文化調査会 2013年

付表1 土器観察表

番号	器種	器形	遺構	口径(cm)	高さ(cm)	色調	備考
1	土師器	皿	土坑7	7.4	1.5	灰黄色	
2	土師器	皿	土坑7	7.6	1.2	灰黄色	
3	土師器	皿	土坑7	9.5	1.5	にぶい橙色	
4	土師器	皿	土坑7	9.4	1.4	灰白色	
5	土師器	皿	土坑7	9.1	1.5	灰黄色	
6	土師器	皿	土坑7	9.0	1.7	灰黄色	
7	土師器	皿	土坑7	13.4	2.6	にぶい黄橙色	
8	土師器	皿	土坑7	13.4	2.5	にぶい黄橙色	
9	土師器	羽釜	土坑7	26.0	(15.0)	浅黄橙色	
10	白色土器	皿	土坑7	8.8	2.3	灰白色	
11	白色土器	椀	土坑7	7.0	2.6	灰白色	
12	白色土器	高杯	土坑7	—	(4.3)	灰白色	杯部
13	白色土器	高杯	土坑7	—	(10.3)	灰白色	脚部
14	瓦器	椀	土坑7	6.6	2.3	浅黄橙色	二次焼成を受ける
15	瓦器	羽釜	土坑7	17.6	(9.2)	灰色	
16	土師器	皿	整地層	9.5	1.0	灰白色	
17	土師器	皿	整地層	9.0	1.5	灰白色	
18	土師器	皿	整地層	9.4	1.7	灰黄色	
19	土師器	皿	整地層	8.6	1.9	灰白色	
20	土師器	皿	整地層	9.0	1.9	灰白色	
21	土師器	皿	整地層	9.1	1.5	にぶい橙色	
22	土師器	皿	整地層	9.0	1.6	灰白色	
23	土師器	皿	整地層	9.0	1.9	灰黄色	
24	土師器	皿	整地層	14.2	2.4	灰黄色	
25	土師器	皿	整地層	13.6	2.4	灰白色	
26	土師器	皿	整地層	13.8	2.4	褐灰色	
27	土師器	皿	整地層	13.2	2.6	浅黄橙色	
28	山茶椀	皿	整地層	7.8	2.3	灰白色	
29	須恵器	鉢	整地層	—	(7.8)	灰白色	東播系
30	輸入褐釉陶器	鉢	整地層	29.0	15.4	灰白色	釉色:浅黄色、口径・器高は復元値、泉州窯系
31	瓦器	羽釜	溝2	—	(4.0)	灰黄色	
32	瓦器	盤	溝2	—	(8.1)	灰色	
33	輸入白磁	椀	土坑7	—	—	釉色:灰白色	

番号	器種	器形	遺構	口径(cm)	高さ(cm)	色 調	備 考
34	輸入青磁	椀	土坑7	—	—	釉色:灰白色	
35	輸入青磁	椀	土坑7	—	—	釉色:オリーブ灰色	
36	輸入褐釉陶器	盤	土坑7	—	—	釉色:オリーブ黄色	
37	輸入青磁	椀	整地層	—	—	釉色:灰白色	
38	輸入青磁	椀	整地層	—	—	釉色:灰白色	
39	輸入青磁	椀	整地層	—	—	釉色:灰白色	
40	輸入青磁	椀	整地層	—	—	釉色:灰白色	
41	輸入青磁	蓋	整地層	—	—	釉色:灰色	
42	輸入青白磁	合子蓋	整地層	—	—	釉色:明青灰色	
43	輸入白磁	壺	整地層	—	—	釉色:灰白色	
44	輸入緑釉陶器	盤	整地層	—	—	釉色:暗緑色	泉州窯系

※()内の数値は残存値

付表2 瓦観察表

番号	種 類	遺構	現存長(cm)	現存幅(cm)	現存厚(cm)	色 調	備 考
45	軒丸瓦(蓮華文)	土坑7	径13.2	—	1.8	灰色	播磨産
46	軒丸瓦(蓮華文)	整地層	復元径13.0	—	2.7	暗灰色	
47	軒丸瓦(蓮華文)	土坑7	9.9	5.6	2.0	暗灰色	
48	軒丸瓦(巴文)	土坑7	径12.0	—	2.3	灰色	
49	軒平瓦(唐草文)	整地層	2.6	4.0	1.8	灰白色	
50	軒平瓦(斜格子文)	土坑7	7.5	—	2.1	暗灰色	線刻の斜格子文
51	軒平瓦(巴文)	土坑7	12.4	3.5	2.1	暗灰色	直線文のヘラ記号

圖 版



1 第2面東部（東から）



2 第1面全景（南東から）



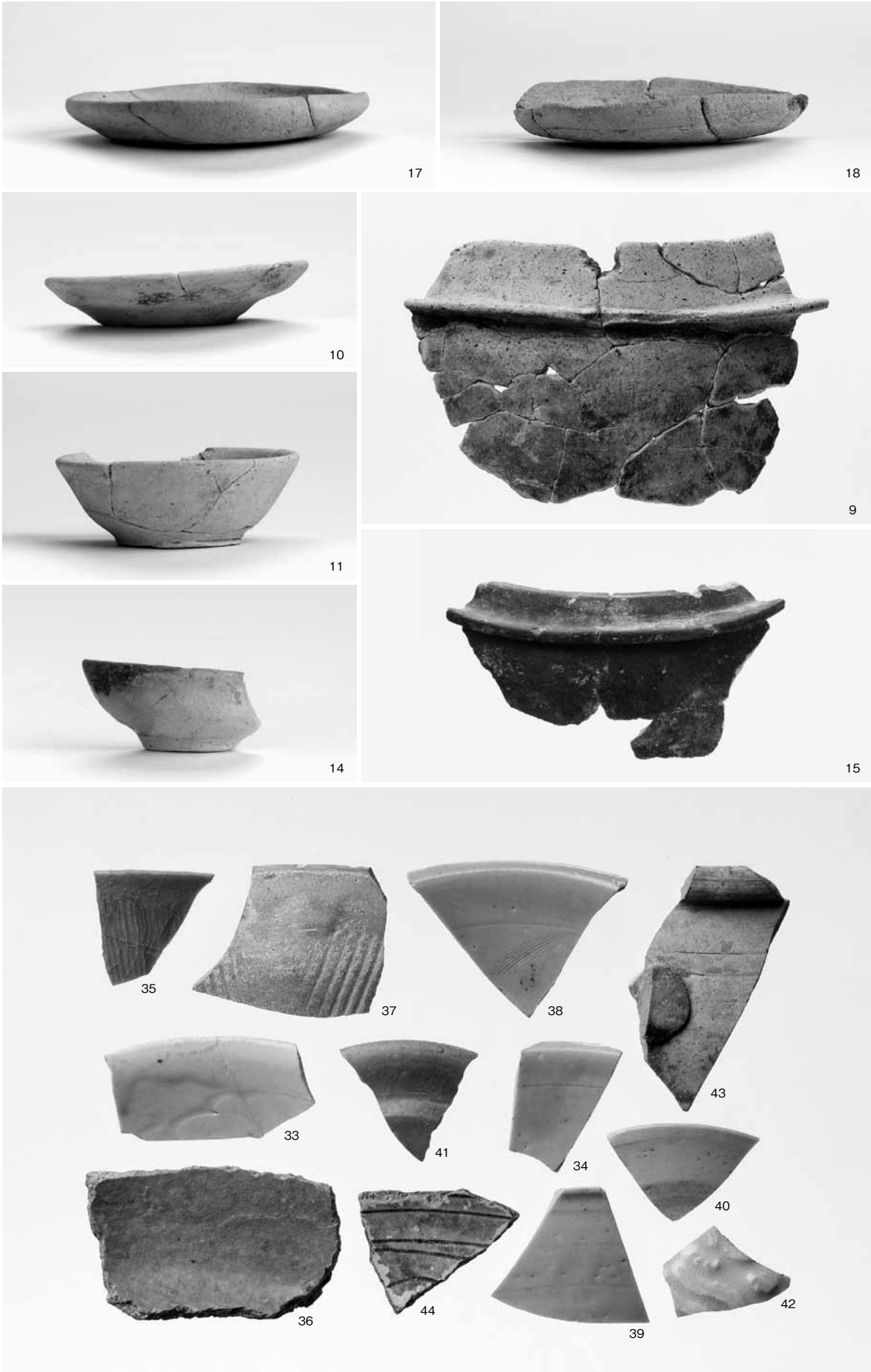
1 整地層下部 (南から)



2 土坑7 (北西から)



3 土坑1 (西から)



土器類



報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと							
書名	法住寺殿跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-14							
編著者名	木下保明							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ひがしおおじどおりしちじょう 東大路通七条 さがるひがしかわらちょう 下る東瓦町964	26100	546	34度 59分 16秒	135度 46分 31秒	2020年1月 20日～2020 年2月7日	86.25㎡	収蔵庫 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡	寺院跡 離宮跡	平安時代後期 ～鎌倉時代	段差、土坑、溝	土師器、須恵器、白色 土器、山茶椀、瓦器、 輸入陶磁器、軒丸瓦、 軒平瓦、丸瓦、平瓦、 石製品、木製品、鉄製 品		法住寺南殿造営時 に地山面を削り平坦 面を造成している。 造成面の上で整地 層を検出した。		
		近世以降	土坑	土師器、施釉陶器、焼 締陶器、染付、瓦、石 製品、木製品、土管				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-14

法住寺殿跡

発行日 2020年6月30日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961